

平城京左京八条三坊発掘調査
現地説明会資料

75. 3. 29

奈良国立文化財研究所

発掘調査の経過

この調査は、奈良県が奈良市東九条町亨姫寺に計画した西亮間
田地建設予定地の事前調査として実施したものである。調査は、
奈良国立文化財研究所が、奈良県の依頼をうけて行った。この
地域は、平城京の東市（公設市場）を一部含む重要なところであ
る。

調査は昭和50年1月20日から始まり、現在発掘調査予定地のう
ちの約4分の3を終了したところである。

調査はまず予備調査として、敷地全域の遺構の残存状況を探
らねばならない。幅5m、長さ100m以上の試掘トレンチを、東西
に1本、南北に2本入れた。その結果、高低の異なるこの地の地勢
は、若井川の氾濫により土砂が堆積したものであることがわかった。
一方、三つの礎石列をはじめ、多くの掘立柱建物、数条の溝を確
認することができた。この所見をもとにして、いまつづき、南
西の小路をふくんで、左京八条三坊の9坪を中心として本格的な調査を
実施した。その結果、東市がどこにあるかの文献上からある推定通り
この地域に所在する可能性が強いことを推定させることになった。
礎石列の発見された寺跡遺跡、および東市遺構にふくまれる地域
の調査はいまつづきこの後に行なわれるが、以下概略これら
の成果を記しておきたい。

遺構の概要

奈良時代条坊に関するおもしろい遺構には南北および東西小路、東
市北辺をめぐり溝、堀川、寺院跡がある。このうち堀川と寺院跡
については今回はじめに所在が明らかになった。おもしろい遺構に
ついて、その概略をのべてい。

<小路> 発掘区の東寄りに9坪と16坪を区画する南北小路90mを
検出した。小路幅4m程度あり、東西に倒溝をもつ。東倒溝（幅2m、
深さ0.4m）が大きく、西倒溝（幅1m弱、深さ0.1~0.2m）は細く
浅い。西倒溝をふくめて道路幅員は6m（2丈）ある。南北小路
は発掘区の東南部で東西小路と交叉する。東倒溝は狭まって南
行するが西倒溝は東西小路北倒溝と連続する。東西小路の規模
は南北小路とほぼ等しいが、南倒溝（幅3m、深さ1.5m）は東市
の北辺を画するのために特に大きい。この南倒溝は南北小路下の木
敷暗渠（2.5x0.2）を通って東行する。なお南倒溝からは木簡・土
布・漆器・銅銭などをはじめとする多量の遺物が出土した。

<9坪の遺構> 東西および南北小路と堀川に囲まれた9坪は、
坪内に南北小路に沿った幅1mの溝がめぐり、南辺は一部途切れ
るが東辺には門のような施設（2.8x2.8）が関く。この内方に掘立柱建
物の棟・井戸の基・堀の基・溝・土灰などの地がある。各遺構は重
複関係などから3期以上の交差が認められる。建物はその規模か
ら4通りのものがある。その1は2.8x3.6・2.8x3.1・2.8x2.9で南半部
にある。1つは東西棟のうち2.8x3.6・2.8x2.9は北廂を構え、主
室的なものとみられる。その2は2間x3間の規模で柱間寸法が5
尺〜5尺の小型建物でほぼ全域にわたり、その数も多く、南北棟

建物と主とする2ヶ所が特徴である、その3は1間×1間あり、
1は2間×2間の柱間寸法が5尺〜8尺の正方形小型建物である。
5棟あり、東半部に集中するもの4は発掘区西北隅にある3間
×3間の建物である。柱形が極めて大きく、北側の七条
大路と西側の堀川に接した位置に接していることと併せて特
別な特徴とみられる。

井戸3基のうち2基(一辺0.7m, 深さ1.5m)は縦板組む、SE03
(一辺0.7m, 深さ1.5m)は横板井籠組む。

<10の坪> 東市内にあり、この北東隅にあたる。検出した遺構
は建物1棟、東西溝、南北溝、土坑のほか、小柱多数がある。
(0.1, 1.0)の調査範囲では外周をめぐる堀、築地帯の飛跡
はみいだしていない。

<16の坪> 建物3棟(20.2・20.4・20.5)および堀(20.6・20.4・
20.5), 溝、南北小路東斜溝に注ぐ東西溝2条などがある。

堀河 今回、検出した堀川は、幅約10m, 深さ約1.5m(遺構検
出西)の規模をもち、発掘の結果、当初、発掘の堀川であった
ものを、その後、抗七平版を組み合せてシガラミ状の施設で、
緩岸工事も行っていることと判明した。多量に出土した遺物
は、緩岸施設以後のものと思われる。この改修工事の時期は、当土
遺物の年代から奈良時代後半と推定される。遺物の多くは、土
器類が大半を占め、若干の瓦葺、木簡、木簡が出土した。また、
土器、人面土器、人形といった呪術的色彩をもちた遺物も多く
出土した。こうした遺物の堀川というに甲北施設から多量に出土
した遺物に注目すべきであろう。なか、出土土器のうち、発掘
奈良時代末から平安時代初期のものも多く、その以前のものが
破片に絞られる傾向にある。この中、堀川の発掘が発掘
館に行なわれていたことと同時期に、早成京の発掘と同時
に、その交通の要が衰微し、堀川の発掘(北に推定される。ト
レンチの断面から判明する)、堀川の部分にのみ、堀川の発掘
にはある程度までみられ、東市(20.2・20.4・20.5)
その発掘がなされ、後述の通り、この遺物の多いことと推定さ
れる。堀川と大和川を結ぶ、遺河(2の機能をもつたこの堀
川の遺構調査は、今後の差(近った重要課題といえる)。

<15の坪> 東西小路南側溝に接した堀(20.7), この南側に東西
方向に並ぶ礫石列2列(20.8), 礫石列南側に双(20.9)瓦葺面
がある。礫石列は東西方向に24m(8尺), 南北方向に30m(10尺)
あり、北に1.2m東に10m程掘(20.10)している。瓦葺面からは奈良時
代の瓦と七条に飛鳥時代、奈良前期の軒瓦が出土(20.11)し、
この発掘が寺院跡であることが確認されることと調査地域の南に接し
てある天神社が寺院の主要部分にあたることを推測されること
にあった。

各遺構について
1の坪 遺構 今回の調査で堀の中央を南北に走る堀川がみつか
る。このことから、この坪は大きく東半と西半に分けられ、南北に長

い、巨画であり、また南北小路の間には幅6mの建物のな
い空間地的なものが置かれていることがわかった。外周を囲う
施設として南側の堀川があり、東端に小路に向(2門を隔く。
内方の建物配置は大型建物が東半に集中し、北半部には小型建物
が比較的多く、さらに東半部は井戸を中心に小型建物がみられ
る傾向がある。現在のところ建物地域間を仕切る堀川の施設
がみつかっていないことから、堀川が一括使用された可能性
は考えらるが、にはわがには誤(難い。さらに本坪が東市に
北接することから、一般史地とみるよりは市と関連する施設が
存在する可能性を考慮させる。

このような一定の区画の古い建物配置をいつの坪のあり方は
従来文献上から推定されている当地朝りとも異なる。今後の大
きな課題であろう。

堀河 早成京の東堀川は従来天平勝色八歳(756)の藤原司藤
原市庄所也知恩院所蔵市田書に記し東市の西端、八条三方
二〜四坪の東より二丈の堀を斜溝(20.11)と推定されていた。
ところが、発掘の結果、八条三方十坪から南の堀川が
南北に流れていることが判明し、河川を築(20.12)の遺構が
みつかっており、これが今日の堀川と推定された。発掘にみ
れば、その水跡が九坪の堀川中心を河幅西又端で流れ、地割に
よれば東市の東半分十・十一・十二坪の東端部を貫通すること
がみられ、東市の物質遺構に重要役割を果した堀川の遺構であ
ると推定される。

16の坪(寺院跡) 南北トレンチに検出した遺物列をめぐって
坪内にあり、寺院に付いては全く判明(20.13)の遺物であった。今
回の調査では主要部分の調査に回ることができたが、出土遺物の
は飛鳥〜奈良前期にわけつけられ、そのうち、寺院に
あり、その東側に埋めこまれたものとみられる。この地は「
堀河」であると、發掘時代末期の地割に「ヒメタウ」の字が
みられるのは寺院の主要部分にあたることを推測される。天神社の
西側に「ヒメタウ」の字がみられるのは、寺院の主要部分の
市の寺り神といわれる「市姫の神」・「市姫念光寺」と推定さ
れる。寺の関連において、この遺物の重要である。

出土遺物

今回の調査地域から多数の遺物が出土(20.14)。遺物の出
土は東市北側溝、堀川、井戸20.1・20.2から出土した。(東市北
側溝) 発掘遺物の奈良時代遺物として以下のものがあ
る。

木簡 17(うち割片2)重要なものに「東宮寺奈 直」
「直上敷一功四葉」
土器類 土師器、饅頭形砂器。施物陶器(灰釉片)2片、遺言
土器として「川部麻之」
銅器類 「川部麻之」
のほかに記述の多い七条の2.12, 人面土器1, 土器などがある。

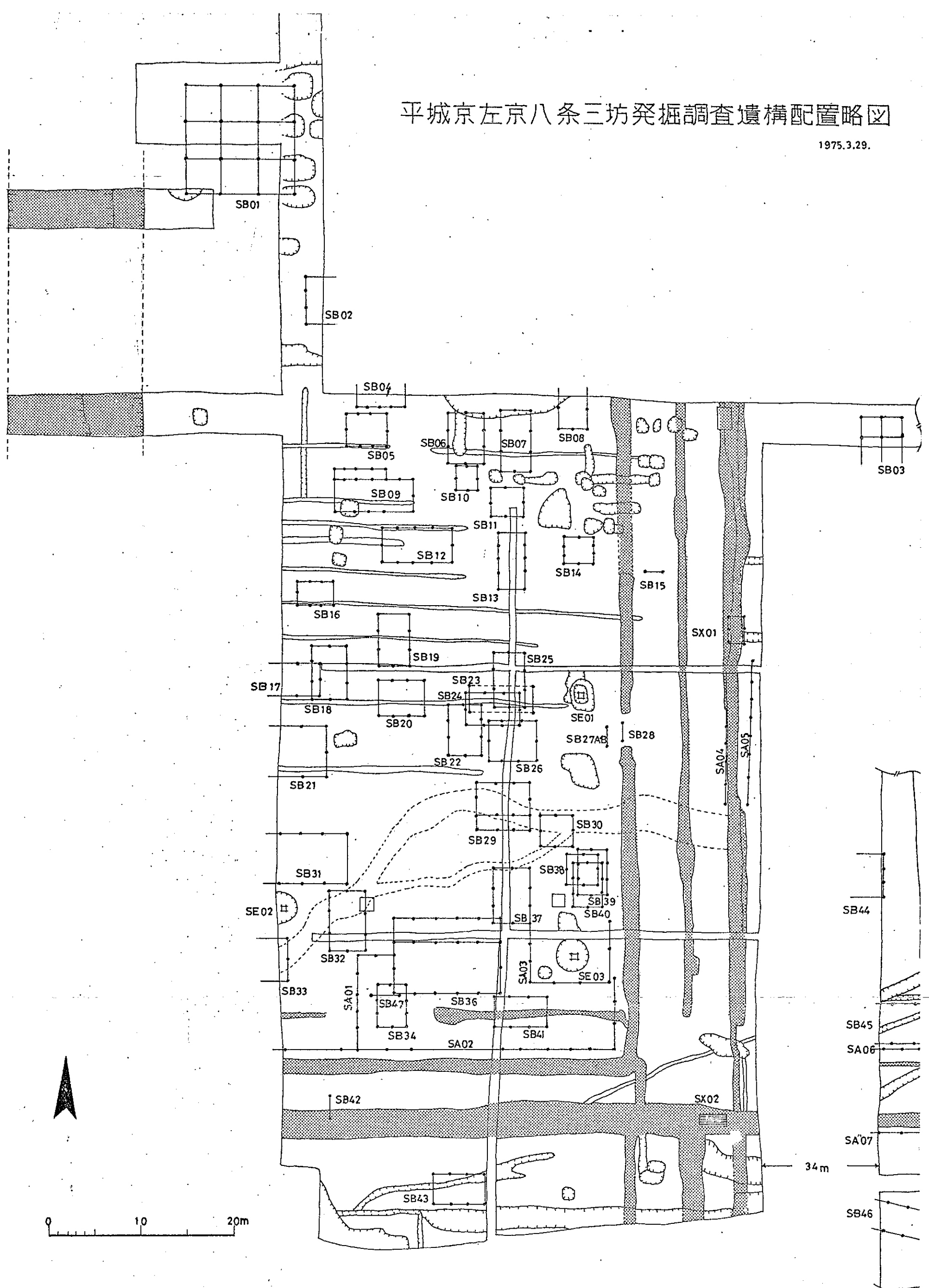
また土師器杯、須恵器壺などに漆の付着したもののが相当数ある。こは注目される。木製品では挽物(盆)1・漆器(匙)1・曲物片・下駄1・櫛7・かんざし2・へらと刷毛10・削りかけ・人形1・人物画のある板2があり、ほかには和同開珎19・麻(紙)・紙片・皮革片が出土した。金属製品では和同開珎19・金具10・小型銅鏡2・銅薄板1・銅釘1・鉄釘10などがある。ほかにろっぽ片、磁石片が出土した。

〔堀川〕 主な出土遺物として以下のようなものがある。木簡3
 「□百七十文□□」・「□□□料酒一斗三升」・「□九年
 九月廿五日」・符民使彼在「□」・土器類(土師器、須
 恵器)多数・墨書土器として〔大福一須恵器〕〔佐一須
 恵器杯〕などのほか、記号的なものを含め29・人面土器14・
 硯2・土馬47・土鐘1がある。木製品では挽物(高杯1、皿
 1)・漆器片・曲物3・杓子3・人形が出土した。金属製品
 では鑄造関係遺物とともに鑄放しの和同開珎3・和銅開珎12・
 神功開宝4・帯金具8・銅鈴1・海老錠1・鉄斧1・刀子1・
 鉄製工具柄1・鉄釘6があり、ほかには鑄型破片1・スラッグ
 がウス玉4が出土した。なかでも鑄放しの和同開珎は極めて
 めずらしい例で鑄造関係遺物とともに注目される。堀川出土
 の土器では奈良末から平安初頭にかけてのものが中心にな
 ており、堀川の機能が停止された時期を示しているものと思
 われる。

また井戸 SE 01・SE 03 からも多数の奈良時代の土器が出土
 したが、このうち SE 01 からは完型の漆器(壺)が出土した。
 このほかの遺物から出土した遺物は断片的なものが多く、今
 後整理しなければならぬが、三彩(HQ 42、東の南北遺)・
 緑釉などの施釉陶器が出土したことは注目される。
 瓦類 奈良時代の軒瓦は主として9坪、堀川から出土し、軒
 丸瓦(6135A・6135・6138A・6225・6284・6304・6348)、
 軒平瓦(6664・6671・6691・6721・6732)など計32点が
 ある。また15坪内礎石列および瓦散布地域周囲を中心に養鳥
 時代軒丸瓦(単弁8弁3点、単弁10弁3点)、奈良前期の軒
 丸瓦14点、軒平瓦22点が出土した。このほかに井戸 SE 03 の
 南西にある円形のピットから弥生式土器(茅葺様式)約15点
 が一括で出土している。

平城京左京八条三坊突掘調査墳構配置略図

1975.3.29.



調査地位置図

